

ものいわぬ動物たちのために

「あきらめないで、その眼は見える様になります。」

白内障

鳥取大学農学部附属動物医療センター獣医神経病腫瘍学分野

准教授 伊藤典彦

人は年を取ると水晶体が濁る白内障になります。程度の差はありますが60歳を越えると、ほぼ全ての人の眼に白内障がみられます。道路標識や新聞が見えづらくなった時には、手術をして再び見える様になります。人の水晶体再建術は外科手術の中でも最も洗練された手術です。手術時間は10分程度、日帰りで手術が施行されています。この白内障は犬にもみられます。人の多くでは、年を取ると発症する加齢性白内障ですが、犬の多くは若いうちに発症する若年性白内障です。トイプードルやアメリカンコッカースパニエルなどの特定犬種の両眼によく見られることから、遺伝的な背景も疑われています。

犬の白内障手術は人と同じです。眼の外側を守る角膜強膜に小さな穴を開けます。水晶体を収めている袋に小さな円形の穴を開けます。濁った水晶体を超音波で砕き、その破片を眼の外へ吸い出します。最も長く切る場所で6mm程度です。当センターでは人眼科と同じ眼科用手術用顕微鏡と白内障手術装置が導入されております。

世界的に水晶体再建術の成功率は56~95%と報告されています。当センターでのこの4年間の手術成績を振り返ってみましょう。手術をした眼は25眼でした。犬種はトイプードルが11眼、M. シュナウザーが4眼、M. ダックスフンドが3眼、その他5犬種が7眼でした。ブドウ膜炎や緑内障などの術前の併発疾患は60%にみられました。眼内レンズは96%で挿入できました。術中・術後の合併症の発生率は各々0%、80%でした。術後合併症のうち視覚に影響を及ぼす可能性のある疾患は15%で、残る85%は経過観察あるいは内科療法で対処可能な疾患でした。術後、最終観察時の視覚の回復率は92%でした。全世界的に見ても、勝るとも劣らない成績でした。

犬の白内障は治すことができます。たしかに、室内犬たちは家の中ではものにぶつかることはないかもしれませんが、しかし、ものいわぬ動物たちは、その辛さを言葉で訴えることはありません。犬は人と目を見て心を通じ合える動物です。だからこそ、我々は全力でできることをやってあげるべきではないでしょうか？

目と目が、心と心がつながるあの日にもどれるように、当センターではそのお手伝いをさせていただきたいと思っております。